

玉琴集

小林紫軒著

文學圖書會藏版

223
595

087935-000-7

特63-954

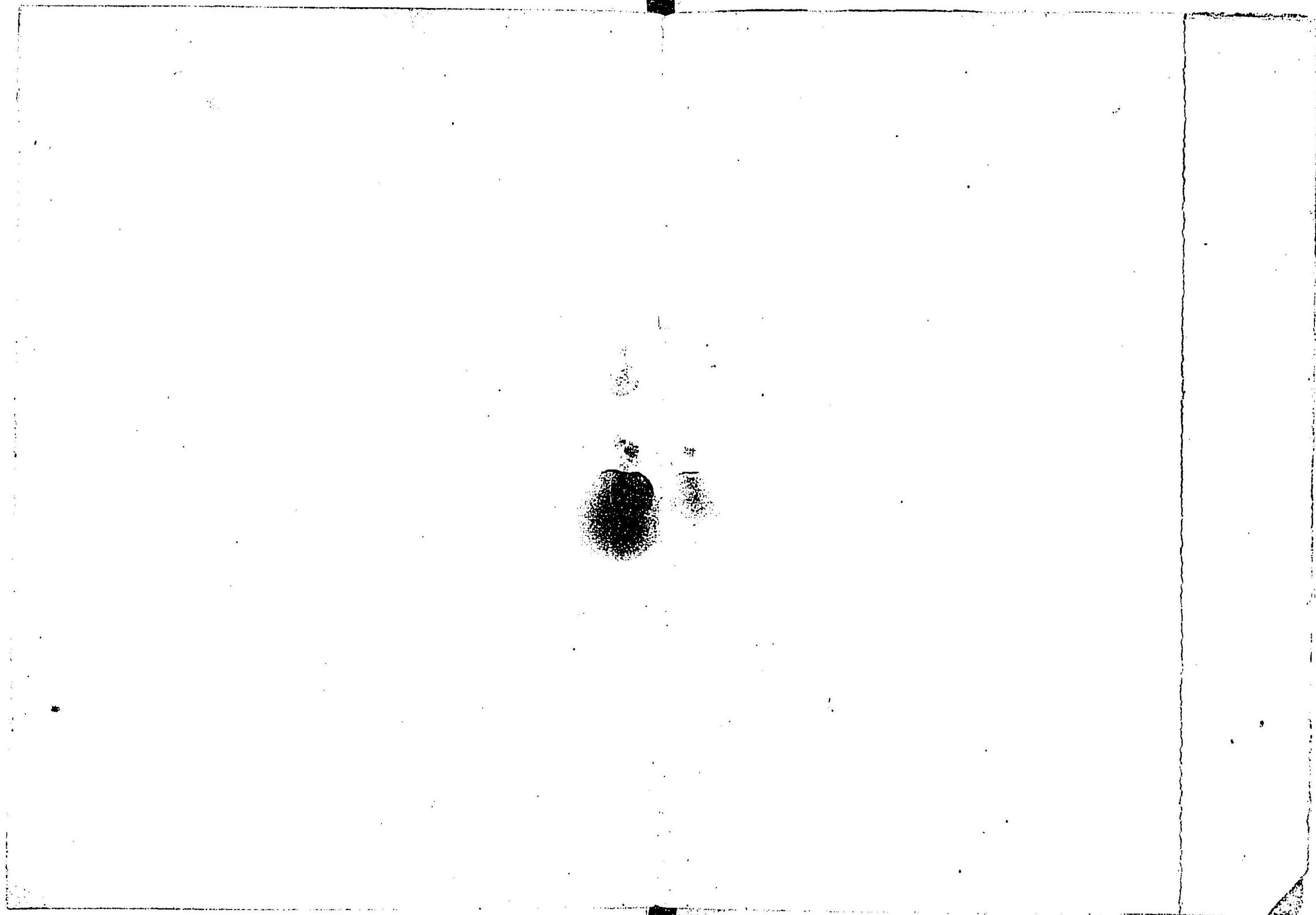
玉琴集

小林 紫軒 / 著

M37

DBG-0025





特63

954

正琴集

小林紫軒著

文學同志會藏版

明治
37 11 22
肉交

はしがき

『玉琴集』中載するところの新體詩、もと之れ予が事に觸れ、物に感じてものしたる一の文反古に過ぎずして、その名の雅びたるに似て、まことは鄙びたるものなり。然れども、さすがに焚き捨つるもをしきと思ふ折柄。頃者大月乗山氏、新體詩復興の秋にあたり、开が自然、人生、神秘を吟咏するに、いかに自由なるかを世の後進に知らしめんと

て、あらゆる作品を蒐めんとし、予の述作を購む予素より淺學、到底氏の満足に價すべきもの之なくも、而も氏の斯學に忠なる何ぞ黙過し得べけんやと、即ち自己の拙なきを表はすこと、せり。必然僭上のそしりは免れざるところ。若し夫れ、やや價値あるものに至つては、爾後研學、以て他日を期せんのみ。

明治甲辰の秋、鶯里麻孤燈の下に
著者しるす

内 容

田園の春	紅筆草紙	春の月	花寶少女	旋の轉	夏の野	涼の風	波舟守	いろどり雲	句ひ鳥	題しらす	君來らず
.....
一頁	五	一三	一四	一五	二一	二六	三一	三五	三七	三九	四〇

なま ま り 歌	虫 の こ み	雁 の 一 つ ら	く れ な い	つ ゆ 草	し ら 萩	菊 花	秋 さ び し	朝 顔	月 姫	ま ぼ ろ し	蟬 の 身	夏 の 月	螢 火
.....
九 五	九 四	九 二	九 〇	八 八	八 七	八 六	八 三	八 一	七 九	七 七	七 五	七 四	七 二

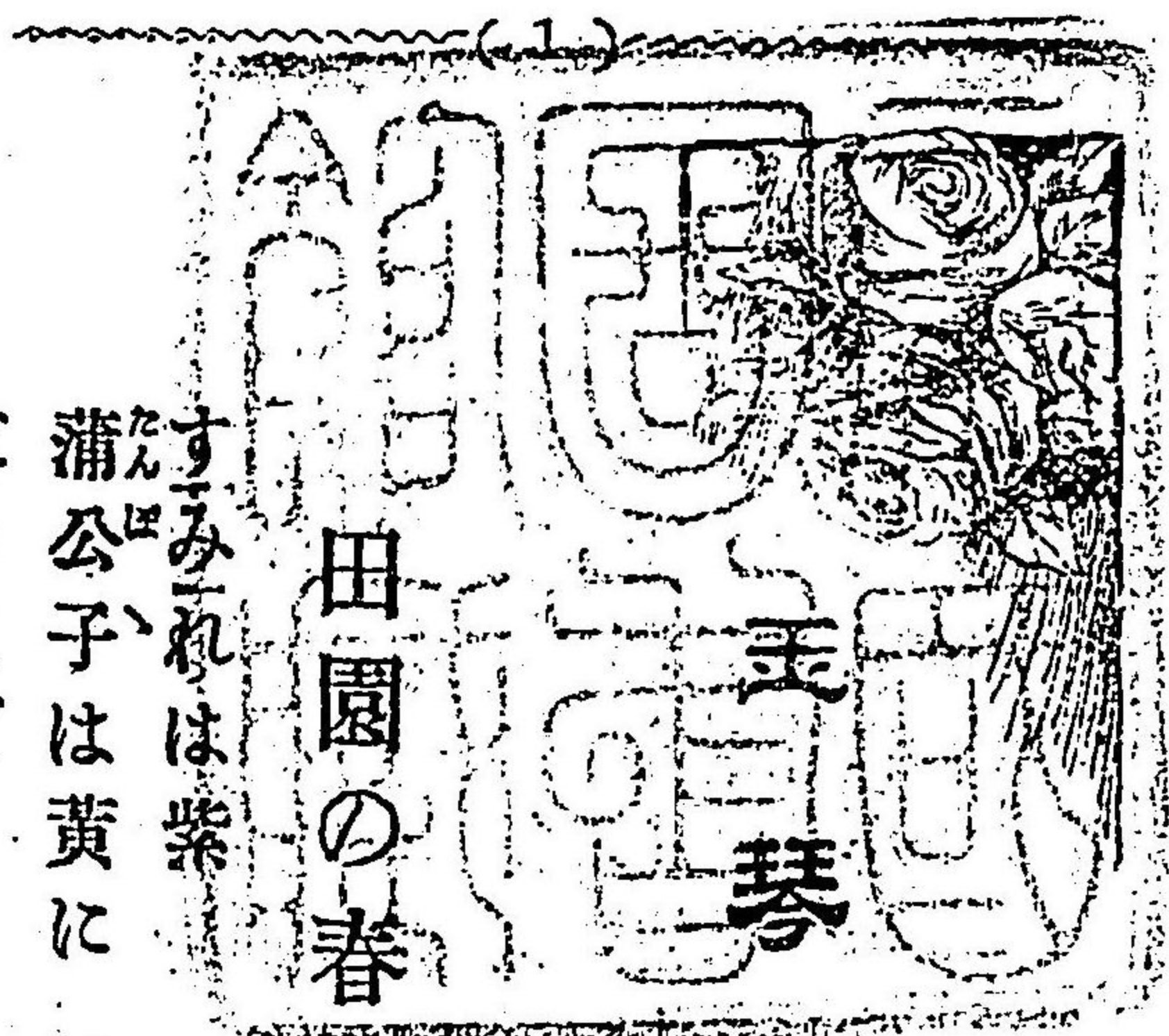
夏 の 夕	夏 の 小 川	戀	し ら 玉	夕 ぐ れ 空	夏 の 蝶	秋 の 夜	春 の 行 衛	そ ら あ る き	や さ し き 乙 女	摘 草	不 可 能	首 途	瀑 布
.....
七 〇	六 八	六 七	六 六	六 四	六 一	五 九	五 五	五 三	五 一	五 〇	四 八	四 四	四 一

つきせぬ怨	一五九
機織る乙女	一六三
君やゆかしき	一六四
静に眠れ	一六八
閑居	一六九
老詩人	一七一
春怨	一七三
生花	一七四
挽みし枝	一七八
梵鐘	一八二
垣間見	一八三
松の聲	一八五
不可解	一八六
嗚呼大塔宮	一八八

五條橋	一九二
豊太閣	一九九
征露の詩	二〇一
遠征の歌	二〇五
凱歌の曲	二〇八
ぼーらんの滅亡	二一二

内容(畢)

集 琴 玉



すみれは紫
 蒲公子は黄に
 紅きは何

集

小林紫軒著

春の野を
日よ！
汝は何故急ぐ
西の雲の黄金色も
山の端に入る汝が姿も
美しからぬにあらず
されど开は瞬の間
暗き夜の始めなり
日よ！、日よ！
何ぞ春の野を捨つる
日は黙して

白きは何
雲雀さへずる妙なる調べ
美しき春の野
道ありいと細く
少女が手にせる鎌
籠を脊に負ひ
頭を卷さし手拭白く
森の木陰
睦し氣に小牛の遊ぶ
美しき
樂しき

オレンジ色に野をあびせ
世の果てに入りぬ

紫はすみれ

黄の蒲公子

紅きは何

白きは何

囀る雲雀

遊ぶ小牛

暗き夜の幕にとざされて

美しき田園の春も亦終りぬ。

紅筆草紙

花には露も宿るべし、

露には月も遊ぶべし、

少女にあらぬをとめ子に、

ふさはしからぬ涙かな。

少女血潮、羞耻、いのち、

消えての後のあけくれに、

かれ果てしと思ひしは、

あだなりけりな憂きなみだ。

曉月夜ほとゞぎす、

うらみある世に啼けばこそ、

ゆふべの雨のさりくす、

人目なき野にすめばこそ。

世をうらめしとかこちなば、

思ひいたらぬ思ひなり、

佛も神も人の世も、

うらまれぬ身ぞあぢきなき。

つゝむに餘るおとろへは、

鏡にうつるおもかげの、

變り果てにし我が身にも、

かはらぬものは涙のみ。

にじむ一筆まゐらせて、

問はまし君にいざさらば、

今の歎きにはふり落つる、

これも涙か、をとめ子の。

かゝらましかばかゝらずも、

たつきもがなと思ふさへ、
染まぬにあらぬ濁り江の、
われはづかしく罪深し。

悟の後にさとりなく、

迷ひの末にまよひあり、

因縁解けてうすがすみ、

霞のはては何かある。

緋にむらさきのうちかけに、

つゝむおもひのあさましく、

ゆるべくのよそほひは、

誰れに見よとのいろどりぞ。

涙も笑もなにならず、

ひさぐなさけの化粧のみ、

浮世へだつる戀ごろも、

狭布のほそぬの胸あはず。

なさけのほかの情をば、

なげの情と誰れかいふ、

あだしあだ浪ひとそよぎ、

行衛いづくと問ふなかれ。

君つれなしと恨みしは、

戀知らざりし身なりけり、

つれなかりしはなかくに、

なつかしかりしなさけかな。

燈火あかさ高樓に、

ふたり相逢ふ四つの袖、

そのあかつきのさぬくは、

あはれ汚れし戀路なり。

泣きてうらみて世をわびて、

相見んすべも盡さしとき、

清く尊き戀ありと、

今のいまはに今を知る。

戀はうらみに咲く花か、

恨は戀にむすぶ實か、

此世あの世のへだたりも、

何かいとほんいざらば。

蝶のなみだは秋の露、

花もひと夜は宿すべし、

すがたを餘所のおもひのみ、

君が夢路にいざとづれん。

*
*
*
*
*
*
*

篤 里

色鳥や戀の目黒の比翼塚

櫻見の好色五人女かな

夜櫻や美女三千の仲の町

春の月

落ちても見えぬ、夕ひばり、

遠く聞ゆる、くれのかね、

つかれし足の、なよくと、

家路にかへる、さとわらべ、

をちこち匂ふ、花の香に、

かすめるかげは、春の夜の月

*
*
*
*
*
*
*

花賣少女

朝さはやかに 花賣る少女、
 紅葉のごとく、 あざやかなる手、
 我にとりてむ、 其の白き梅、
 汝が胸にもゆる、 情をそへて。



旋 轉

人の世、遠く三千、
 淳朴の氣いつか衰へ、
 國益々開け、人智愈々進み、
 旋轉、是に穩かならず。
 智惠多くして憤激おほく、
 智識を増して憂愁をまし、
 國ひらけて、國欺き、
 人智すゝみて、人詐る。

人のなす諸々の動作

朝陽に公義を説き

夕陰に邪曲を企る

神命、果して如何に。

世につとむ種々の行爲

上、聖賢を畏れず

下、幼民を恤らず

天咎、亦辭す可けむや。

君子黙して野にかくれ

小人さけびて位を争ふ

露の名譽に世を貧り

果敢なき權力に人を虐ぐ

巧みなる、筆

うるはしき、言

今の世に擧げられ

今の人用ゐらる。

邦のため、勤ならず

家のため、儉ならず、
君のため、忠ならず、
世の爲終に誠ならず、

近き世の人、大方、

耳に迷聲を喜び、

口に偽善を語り、

意に不義を懐ふ、

人心、惟れ危く、

道心、惟れ微なり、

古への士、かしこしや、

聖賢の書、尊しや、

五十鈴川の其源泉、

清し、麗はし、潔よし、

末の流のなか濁れる、

亦、源にかへるべしやは、

智恵多くして憤激おほく、

智識を増して憂愁をまし、

國ひらけて、國あざむき、

人智進みて、人いつはる。

淳朴の氣いつか衰へ、

國益々開け、人智愈々進み、

旋轉、是に穩そたかならず。



山吹や夕月うかぶ水のうへ
短夜や柳の河岸に灯の残る
青葉若葉窓に書を読む女あり

夏の野

夏草しげる

野の道の

行衛はこゝぞ

岩が根の

たぎるが如く

湧き出づる

清き泉の

あるところ。

朝靄ふかき

大空に

淡くかゝれる

あか星の

影をやどせる

眞清水の

心のうちぞ

たのもし。

希望にみてる 日の神の

黄金の征矢は ゆら／＼と

朝あしたの聲を もたらしめて

水のおもてを 照らしけり。

戀草もゆる 眞清水は

底の小石も よみうべく

若き藻草に たわむれつ

めだか泳げり 二つ三つ。

夢の如くに 白き蝶

風にゆられて 飛び來り

岸邊の百合と さゝやけば

うなづき笑みぬ 白き百合。

いかなるしほの ありしにや

樂しき夢は 破られて

百合花はこぼれて 水に浮き

無情の蝶は 飛び去りぬ。

白き光は よわりゆき

死と暗黒を

さとするなる

夕の光

かなしげに

泉のあたり

襲ひきぬ

紅むらさきに

葡萄色

静かに變る

大空に

またゝきそめし

明星の

影もやどしぬ

泉には

小さき螢の

きら／＼と

泉のあたり

飛びかふて

闇を縫ひつゝ

行き去りぬ

こぼれし百合花の

魂ならむ



大郎冠者汝聞しか蜀魂
白藤や佛事に籠る刀自が鹿
家五六浮ぶ里あり夢の波
若竹の月夜ながらの小雨哉

朝涼を、
衣そゝぐと。

露しげき、
草のしとねに。
白百合の、
眠はさめぬ。
菓の園を、
歩めば。
巴且杏樹に、
熟したり。

涼 風

薔薇色の、
雲はちきれて。
六月の、
風香ばしく。
強き日は、
緑の葉射て。
野は夏の、
眺めとなれり。

水汲むは、
誰が家妻ぞ。

花染の、
褪せやわづらふ。

細眉の、
惱ましきかな。

迷ひ來し、

牧場に長けて。

牛の乳、

しぼるになれぬ

ゑがきたる、

腫の影は。

夏川に、

流れゆくなり。

夕虹の、

消へなんけはひを。

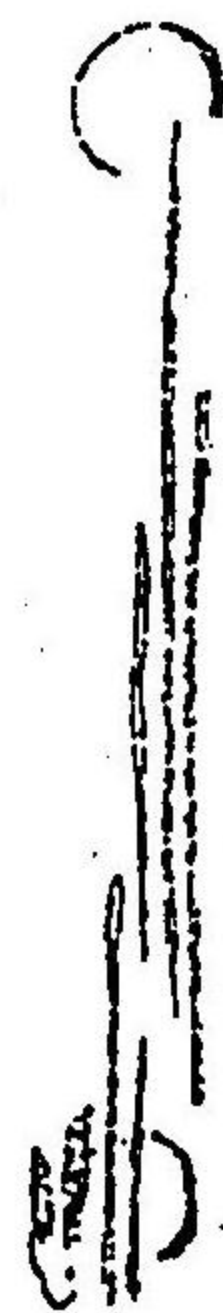
あやうまん、

今にもあらじ。

健やかに、

乾ける草に、

働かば、
寐なば足らん。



川に添ふ卯の花垣や夏座敷
苔の花雨に侘しき塵かな
水打つて燈籠の苔寄き哉
若葉して雨和かう聞かれたり
朝戸出や入江に残る夏の月

渡舟守

青柳の、
枝垂の糸を。
渡舟守、
野川の岸に、
まれに乗る、
人を待つ間の。
手すさびに、
結びつ解きつ。

花うかぶ、
 清き流れに。
 影うつす、
 山の緑を。
 塵の世の、
 けがれは知らぬ。
 たなごこに、
 汲ひつ飲みつ。

世はなれて、
 氣高きすがた。

一葉の、
 舟にのせては。
 つながれぬ、
 たふとき命。
 ひともとの、
 棹にまかせつ。

里川は、
 流れてやまず。
 歳月は、
 めぐりて行けど。

渡舟守、昔ながらの。
面影に、あゝ若いかな。



鬼灯や音さしやかに紅の口
ちよろくと清水流れて小蟹遣ふ
浪影や水にゆりこむ藤の花
五月雨や箒の重き古たゝみ
孤軍奮闘蚤逸したる騒き哉

いろどり雲

うるはしき乙女は立てり川柳、
なんに心の引かるらん、
流るゝ水を眺めやり、
彩なす雲を見上げつゝ。

心あらは、やよ乙女子よ！、
暫らく吾れと語れかし、
松原近うあるものを、
清き流れのあるものを。

世の人は、果敢なき慾に迷ひつゝ、

西に東に走せつから、

黄金の山を望みつゝ、

榮譽の唾をあふぎつゝ。

情あらば、いざ乙女子よ！

塵の憂き世をあとにして、

悪魔の巷をよそに見て、

あゝ、いで立たん天つ御園に。

*
*
*
*
*
*

句ひ鳥

句へる雨後のあけぼのに、

氷も解けん聲立てゝ、

翼を軽るく繕ひて、

早く来よかし句ひ鳥。

梅は咲さける我庭の、

風に自然の榮あり

心に清き玉帯びて、

早く来よかし句ひ鳥。

冷たき谷に鳴くよりも、
無心の山に遊ぶより、
我に詩もあり歌もあり、
早く来よかし匂ひ鳥。

狂女あり案山子に何を語るらく
長き夜を戀に寐たらぬ男かな
紅葉散つて千山黛を抹殺す
稻の花満州の野に満てん哉

題しらず

花に酔ひしは、何時なりし。
昨日と過ぎて、葉がくれに。
暑さを凌ぐ、ものゝふの。
心のうちや、如何ならん。



君來らず

浦風に、靡く柳のその下に、
風琴の、音のほのかに聞こゆ。
待つ君は未だ來らず、
契りなき月の光は、
下に寫せり瘦せたる影を。



水打つて端居の翁茶を喫す
神の鈴引かて鳴りけり青嵐

瀑布

山姫の手織の、
絹のやはらかに、
削れる岩に、
ひるがへる見ゆ。

砂を飛ばし、岩をうつ、
奇き響く聞く時は、
戦ひ勇むつはものゝ、
関の聲に似たるかな。

一度び落ちて谷をゆく、
水の流れを見てあれば、
若き男の子のみちくし、
希望に走る勢あり。
健さを胸にほこりげの、
巖の心も解けよとて、
まかすに惜き柔肌や、
そこには戀も通へるか。
悲しみ多く世を擽て、

眉に曇のかゝる子よ、
こゝに清新の氣を吸て、
乾たる唇を濡せかし。



淨瑠璃を立聞く軒やおほる月
新婚の夫婦らしきが梅見かな
畑打の奉行の噂しきりなり
杖を以て梢を打てば落花かな

首 途

妻は病の床に臥し、

頑是なき子は飢に泣く、

老ひおとろひし父母は、

家の生計に益たじ、

賤が伏家の門邊にも、

召集令は下りけり。

國に報ゆる益荒雄が、

死すべき時は此時ぞ、

さはさりながら老の身と、

妻と小兒は我れ往かば、

便りなき身を啣ちつゝ、

飢と病に斃れなん。

妻は枕を擡げつゝ、

往けよ我良人躊躇はず、

老はとぼり立出て、

皇國の爲とあるからは、

人に後れな我が愛子、

家も妻子も思ふなよ

折から小見は泣やみて

坊も一緒に國敵を

討たんとばかりせがみつゝ

蕨の小拳振りあげて

父は日の出の山櫻

うらやましさを坊も亦

五尺の躰は彈丸^{たまご}の的

生きて還らぬ我こゝろ

去らばとばかり立出る

たけき姿は武士^{ぶし}の

大和櫻にたぐひてん

道途^{かど}の様ぞ勇ましき



青簾浴後の美人欄に凭る
鯉^{こい}芻^{らう}る泉水廣し青すだれ

不可能？

戀せし折もつらかりき、

浮世を渡るつらかりき、

昔しは花とうたはれし、

我れも必らず老いぬべし。

死ぬるもいととつらからん、

いくるもいととつらからん、

あゝ如何にして一族と、

幾百年のわがくにを、

見はてゝ死なんすべもかな。

菜の花や捕虜引く道の砂埃り
燕や板挽く家の軒くらし
同行は蝶と書きたし檜笠
かひくし雛祭る妹の赤穂
夜櫻や送るかむろの小雪洞

摘 草

乙女四五人打そろひ、

すみれたんぼゝ咲匂ふ、

野邊の小道を辿りつゝ、

笑ひ興じて摘む草の。

だんく籠に満つる頃、

吾家の方に振り向けば、

折りしも聞ゆる夕暮の、

鐘はかすみ消入りぬ。

やさしき乙女

未だうら若き春の野に。

若菜摘まんと乙女子の、

赤きもすそを地に引きつ、

つやある髪の其根をば。

白きリボンにかたく止め、

なにやらに似しやさ形に、

房の如くにたれかけし、

いと朗たけき其さまは。

そゞろあるき

月の光に浮れ出で、

せめては日頃つもりにし、

心の憂さを晴さんと、

谷川あたりさまよへば。

夜の景色のあもしろや、

川邊に生へる八千草の、

色とりどりの花のいろ、

或はむらさき或は黄に、

あたりに咲ける蓮花草、

すみれ蒲公英色あとり、

せらるゝ如き思ひあり、

世にも傳ふるあまがみの。

御使など云へるもの、

誠にありとせんならば、

かくもやさしき乙女子の、

如くならんと思ひ浮べる。

*
*
*
*
*
*

月のいろどる美しさ、

露の眞玉もやどり居て、

花の姿の床しさは、

眺めし我れはそゞろにも。

日頃の憂さの拂はれて、

み空の月のそれのこと、

心も清くなりけり。

*
*
*
*
*
*

春の行衛

春の行衛は夢の間に、

西施さいしのおもかげ揚貴妃と、

めでにし姿もむなしくて

しづ心なくおちこちに、

花のふじきのふさまきて、

舞ふ胡蝶とぞ思はるゝ、

あゝ、あはれなれ無慘なれ。

寂しき梢につくくと

啼くうぐひすも聲老ひぬ

花は振りむき木は慕ひ

名残を惜む風情かな

心しあらば春風よ

園生の池の川面に

散りし匂ひの後とめて

淨世の春の水の邊に

いざ舟うけて遊ばまし

この一夜さを花と月と

ともに語らんあかすらん

斗見れば月も十五夜の

樹々の梢をいろどりて

おぼろくと出てにけり

さては今宵の月ざかり

秋の夜

ともしび細く書に倦みて、

西窓ひらき眺むれば、

静かなるかな池の水に、

月は涼しく輝やけり。

この月影にあこがれて、

笛とり出し池の邊に、

腰うちかけて調ふれば、

さゝなみたちて月寒し。

みつればかくる十六夜の、

あな月花も流水に、

ともなはるゝか月と日に。

うたゝ三春の行樂も、

今やいづこに過ぎぬらん。



眉青き女うつくし夏の月
杜若すらりと立し女哉
幟立てゝ片山里の静なる

身の果敢なきを慨くにや、

吹笛の音を慕ふにや、

機織虫の聲高く、

私の調べに合せけり。

草葉は眠り夜も沈み、

ひびきは笛と虫のこえ、

われも真面目に調べしが、

何時いつしか月落ち夜は更けぬ、

*

*

*

*

*

*

*

夏の蝶

夏の日ば、

ゆふべまたれぬ、

繪筆すてゝ、

庭に下りたち、

樹々のみどりに、

水打そゞげば、

雫は餘りて、

石にしたゝる。

汗をたらいの、湯に流し、
ゆふげまつ間の、浴衣かけ
そよふく風に、さそはれて
まよひ來にけり、夏の蝶。

汝もあつさに、
勞れたりや。
羽をやすむる、
露の葉すえ。
さるにても、
我庭のまづしき。

汝をなぐさむる、
花もあらなく。

唯二坪に、たらねども
けがれゆるさぬ、我庭ぞ
なれが平和を、樂しむに
けしうはあらじ、夏の蝶

* * * * *
* * * * *
* * * * *
* * * * *
* * * * *

夕ぐれ空

栗の花ちる

横の家に

終日めぐる

水蓐

疲れし音の

夕まぐれ

涼しく洩るゝ

火影かな

雲雀もおりて

夕川に

すだく蛙の

さゝやきや

空にまたゝく

星の影

うつる秘密や

何ならん

かつみ刈る子も

歸りつゝ

あとにさびしき

捨小舟

茂る木立の

ふる沼は

ひとり螢の

夕べなり

ゆがめる門を

夕まぐれ

柱によりて

おひ人の

みあくるうらの

九折

いそぐ樵夫や

うみの子か

*

*

*

*

*

*

*

しら玉

舞姫去りて、人散りて、
森静かなる、みやしるを、
立去りがてに、彷徨へば。

若葉のつゆの、しら玉は、
星を映せる、そのまゝに、
憂さわが袖を、軽く打つ。

*
*
*
*
*
*

戀

もの憂き秋も半ばせり、
我が戀いまだ成もせず、
思ひを月にかこつなる、
詩をつくりしも夢なれや。

《某氏に寄す》



夏の小川

牧場に通ふ道にそひ、
茂るいちごの緑こき、
下葉あらひて岩にさく、
早百合ゆかしく流れゆく、
實に清きかな夏の小川。

太陽あつき晝は里の子が、
笹舟うかす海となり、
月照る夕、河の葉に、

白玉かざる露とちる、
實にうるはしき夏の小川。

汝が一掬は旅人の、
渴望む救ひの神ぞかし、
汝がさよやきは詩人の、
さぐる神秘の曲ぞかし、
實にくしきかな夏の小川。



夏の夕

長しとぞ、思ふ浮世の夏の日も、
 いっしか西に入りあひの、
 鐘もかすかにをとなひて、
 時からすが我やどに、
 いそぎて歸る夕まぐれ、
 つらなる山のあひだには、
 霞を染むるくれないの、
 色ぞ残りてまばらなる。
 忍ぶの森の下かげに、

けふりはうすく立昇る、
 頃とひとしくなりにけり、
 頃とひとしくなりにけり。



物の見事蠅打止めしと思ひきや
 夕立に動きもやらぬ歩哨哉
 葉となりし春の名所やほととぎす

螢 火

あつき思ひに身をこがす、
情、説くにも螢火の、

ひるは草葉のかげにして、
露はゆかりのいのちとも。

ほたる來よ來よ夕ざれば、

しのぶ乙女のよそほひや、

そらには愛のまなざしの、

星こそたかくかゝるらん。

歌うちしめす笛のきみ、

戀のひとふしむせぶ音も、

更けてはさらに行く水の、

月のひかりをくだきつゝ。



朝霧や千曲を渡る三千騎
萩の戸や明けなば散らん花の色
門の田や稻の穂に出る今朝の秋

夏の月

やがてくれゆく、夕立に、
 目には見えねど、秋かよふ、
 夏やながるゝ、山川の、
 ほとりに人の、聲すなり。
 まひるのあつさ、何づこへか、
 雲わけ出づる、夏の夜の月。

*
 *
 *
 *
 *
 *
 *
 *

蟬の身

やよいたいけの童等よ、
 今しばし待てもちの筈、
 露にひとしき我が命、
 更に惜しとは思はねど、
 なかねばならぬ我が勤め。

葉末を渡る秋風や、
 露に先だつ我いのち、
 暫時なかせよ童等よ。

なかねばならぬ哀れさを、

知るや知らずやわらべらよ、

高くさゝぐるもちの芋、

發止、一聲秋の蟬。



瀧の上に鶯啼くや夏籠り

水車場に語る人あり夏の月

男池女池水濁れくに雲の峯

途暗く、

月おぼろ

柳さつとなびいて

蛙、ふと止みぬ

家一つ

田を割つて途東へはしる

草生に露しげく

水の音さゝやく

まばたく星を仰いで

まぼろし

戸に倚るは誰れ
 暗きに白きおもかけ
 髪亂れて
 風もてあそぶ。
 兩つのおふた涙溢ふれて
 頬をつたふ
 と見れば
 星一つ西へ飛びぬ。



月 姫

伽羅たきこむる玉樓の、
 欄干近くさし寄りて、
 雲間に洩るゝ月姫の、
 静に忍ぶ影見れば、
 果敢なき夢に世を病んで、
 少女の膝になく子等の、
 仇なる戀に似たるかな。

戸に倚るは誰れ
 暗さに白きおもかげ
 髪亂れて
 風もてあそぶ。
 雨つのみふた涙溢ふれて
 頬をつたふ
 と見れば
 星一つ西へ飛びぬ。



月 姫

伽羅たきこむる玉樓の、
 欄干近くさし寄りて、
 雲間に洩るゝ月姫の、
 静に忍ぶ影見れば、

果敢なき夢に世を病んで、
 少女の膝になく子等の、
 仇なる戀に似たるかな。

我が世慕ふて宵々に、
恥らふ面は優しくも、
笑を寄する甲斐もなく、
叢雲厚く運ばれば。

光も色も奪はれて、
病める姿の恨みこそ、
思ひ深くも沈み行く。

*
*
*
*
*
*
*
*
*
*

朝 顔

彼の君はいまだ起きまじ、
露深く門とさゝれぬ、
ふと馴れし小犬尾をふり、
裾くはえわれを導く。

畑つたひ華壇に入れば、
露に笑む絞りの朝顔、
其處にあるコツブ取りて、
新しき清水掬ひぬ。

夢に甘きほつれ髪の人

覺まさてやその枕もと

酔ひ醒めの冷水しみづにあらねど

眼を醒す絞しぼり朝顔



牧場や牛のたりく雲の峯
早乙女の子に持せたる國旗かな
小さき手に硝子の蠅を押へけり

鳥からすなく

山の木末に

落ちかゝる

月かげうすし

秋さびし

いく里の

あさかぜさむく

鐘のおと

身に染みわたる

露ちける、
草村ごとに、
蟲の音の、
いよゝたえと。

ほのくと、

しらむ門田に、

立つ嶋の、

羽かきさびしき。

古井戸に、
ちる梧の葉を、
窓に倚り、
うちかぞへつと、

世の秋の、

ふかきころを、

ひとりして、

そとろにさとる。

*

*

*

*

*

*

*

菊 花

早く見ましと降り立ちて、

柴の籬落かきに近づけば

黄菊白菊とりまぜて

結はれし儘に咲き初めぬ。



虫鳴くや蘭燈暗き袈裟が圍
えらみたる柿漉かりし恨かな
孕み帆や霧に生るゝ島の角

し ら 萩

情を知らぬ浮れ男と

誠を知らぬ浮れ女の

汀みぎはにささし白萩の、

暫しは宿る色も香も、

流るゝ水に映りつゝ。

* * * * *
* * * * *
* * * * *
* * * * *
* * * * *

つゆ草

濃き紫の愛らしき、

螢に似たる露草の、

昨夜の風に駭るきて、

優しき姿傾きぬ。

草刈唄に餘念なき、

乙女は今朝も籠背負ひ、

露の干ぬ間ぞ新らしき、

球のこぼるゝ草刈りぬ。

刈手すゝみて露草に、

鋭き利鎌ふれんとき、

この愛らしき一群を、

残して他の雑草刈りぬ。

美き情に花と花、

囁きあひぬ温かき、

乙女が白き手の甲に、

感謝の雫こぼしけり。

*
*
*
*
*
*

くれなる

みどりの常盤美しう、
枯れぬ木の葉もあるものを、
風に落ち散る汝こそは、
運命はかなく生れたり。

性愚なる人に似て、
なす事もなくあらんより、
老の勇士が思ひ出の、
功のごとく勇ましく。

秋めす神がみなさけの、
時雨にあさし其さまは、
今は最期の錦かな、
道ゆく人の眼をとめし。

青葉色濃き夏にして、
榮華の榮はさもあらん、
物うら枯れの秋にして、
おごる獨りは汝にあるらん。

*
*
*
*
*
*

雁のつら

ましら来て啼く山松の、
かぜの絶間を本堂に、
經よむ聲のたえくや、
伽羅をつゝむ薄けむり。

花あたらしき墳域に、

入日の影のうすれては、

昔にしみ行く白つゆの、

にほひぞ魂を誘ひ入る。

かをりたゞよふ推柴の、
林をわたる鐘のこゑ、
峯ほのかなる夕月を、
かすめて歸る雁のつら。



秋之人願望低徊月萬里
金波銀波月に棹さす入江哉
名物の男黙して月見かな

虫のこゑ

軍いさごとせし小兒こども等去りて、

夕日傾く花の野を、

吹く風強み外國とくごくの、

旗は皆がら倒れ伏し、

ひとり御旗のひらめきて、

凱歌に似たる虫のこゑ。

* * * * *

なまり歌

ちさき子がもだえの果てと見ば足りむ、

誰がおもひ出やわが詩わがうた。

むらさきに毒もつ谷の名なし花かざす

子あらば星墮ちぬべし。

千ぐさ花いろさかりなる里川のつゝみ

つたひに秋の蝶とぶ。

かへり來ぬ羊たづねて野のくれにかむ

も小笛の音には泣かしな。

* * * * *

秋の月

野分の風の、身にしみて、

人目かれゆく、草むらも、

あはれもよほす、虫の聲、

たがためうさを、かこつらん、

はつかりがねの、かげ見えて、

くまなくすめる、秋の夜の月、

*
*
*
*
*
*
*
*
*
*
*
*

小山田

鳴子の繩に鴉カラスなきて、

人かげ見えぬ小山田の、

守るものなくはね釣瓶、

た、秋風のそよぎつゝ、

葉家のけぶりたつ末に、

晴れてぞ見ゆる山青し。

*
*
*
*
*
*
*
*
*
*
*
*

笛の音

夕立過ぎし松の樹の、
 葉末に露の玉むすび。
 涼しく宿る月のかげ、
 笛の遠音も面しろし。
 絶えつ續きつ亦絶えつ、
 戀に沈める乙女子が。
 いまはの際に戀人の、
 名をくり返すごとくなり。

*
*
*
*
*
*
*
*
*
*

片ゑくほ

野良は辛かる酒献さう、
 酒がいやなら菓子食やれ、
 圍爐裡かこんで差向きの、
 米は手作り菜雜炊、
 をとこ聲よき、ざれ唄に、
 をんな微笑む、片ゑくほ。

*
*
*
*
*
*
*
*
*
*

三つの糸

霜夜の辻をきた町へ、
また西まちへ流し行く、
その撥はらおとの消ゆる時、
灰ににじます一雫。

これが道かよ、世の義理に、
一昨年故郷に棄て来た、

女、じまんの三つの糸、
今宵何曲なにか弾くことぢややら。

ほころび

この縫ひぶりに覚えあり、

相弟子中の針利きと、

人もゆるしたお糸さん、

大事な主をかさね襦

縫止めたとは知らなんだ、

それ共此方が後か知ら。

胸は思ひに亂れ髪、

さしうつむいて問ひ落す、

あれかこれかの指搦み、
解いて欲しさのそれも弱味か。



よし切や河船下る朝ぼらけ
湖の西に東に雲の峯
青嵐湖に乗入る武者一騎
たそがるゝ清瀧川や小鮎飛ぶ
葉柳や低きけふりの濱ひさし

紅葉

紅もゆる一枝の、
紅葉を折りて我立てば、
君はかざしに興へよと、
立よる御手をしかととりて、
一と葉を白き胸にあて、
愛の泉と指させば、
耻ぢてそむけし片頬に、
紅さしぬ月てりて、

*
*
*
*
*
*

姉と弟

花よ／＼と尋ね行く、
 姉は流れを見出して、
 弟にしめし掬ひたり、
 清き泉のさら／＼と、
 流るゝ下を見すまして、
 弟は姉にいひけらく、
 流るゝ水は何處へか、
 ゆかんとしつゝ流るらん、
 坊やはそれを知りたいな、

姉は弟を目守りつゝ、
 其方はいまだ知らじとや。

流れはいかに小さくとも、
 流れ／＼とやまざれば、
 遂に流れて其末は、
 大きな／＼海となる、
 坊やもそれに見習ひて、
 つとめ／＼と怠るな。

いへば弟は訝りて、

海とは何と又問ひぬ、

海とは水の親なりと

姉は笑みつゝ教へつゝ、

されどあはれや弟は、

海てふものを知らざりき、

深山路深き一の家に、

老婆と二人住みし身の、

浮世に染まぬ愛らしさ。

*

*

*

*

*

*

*

無 常

いかなる星のきらめきに、

あゝ降りしきし露の身ぞ、

ひぬまの榮光のいたましき、

運命ひとつはさづかりて。

眉ほのかなる夢ならば、

風にはゝたき雲によぢ、

あま空翻けるあら鷺の、

たけき思ひもつゝまゝし。

うすき光の白すみれ、

身はねりぎぬの綾に生ひ、

さむき日かげの園にして、

いつしり初めし花の香ぞ。

あゝまひのぼる陽炎の、

むなしき色を何かせん、

あした紫金のとばりには、

ほろびのにほひ薫じたる

たゆたふ光ゆふやけの、

野末の空の笛のねに、

はや落ち來たる寂寥は、

潮のごとくみなぎれり。

こずゑにかけし白珠の、

落てくだけぬ世なりせば、

春花鳥のひとゝきを、

歌のしらべは聖からん

うれひの草よ胸に生ひ、

心の窓を閉ざらば、

光りあふるゝ園の夢、

花むなしくはさかざらん。

あゝいたづらに小羊の、

春のかほりを慕ふとて、

照る日のかげに闇を追ふ、

くらき心のさすらひや。

あゝなまじひに朱の絃、

おのゝく指にふれそめて、

胸につたはるときめきの、
つきぬ響をいかにかなてん。



月と酒、これ我舟の積荷なり
名月や江崎の燈し夢の如く
さゞ波や昔ながらの隅田の月
澄わたる笛の音色や野邊の月
名月や休憩室の二十分
苦吟する俳句の會や月の前
橋守は何して居るぞ月今宵

大丈夫

富士を脚下に大観す、

我邦狭し抱負大、

壁に垂れたる丈の地圖、

強ならず朱點うつ。

憂とは何借問せん、

とはれ不如意の代名詞、

邪正は一如無二無三、

豈好からずや丈夫の業。

うた人

深山の百合は、白かりき、

園の薔薇は、紅かりき、

聲なき聲を、誰れか聞き、

色なき色を、誰れか見る。



京は花の頃を舞ふなり三千妓
干てある茶巾に蝶の眠りけり
蛙きく夜や夜となり月となり

栗焼きて、
 むかしを語り、
 笑ひては、
 茶をすゝりつゝ、
 曆こよみなき、
 里のどけさ
 さあれまた、
 なぐさめ多し。

聖きよき卷まき、
 いくたびかへし、

獨 居

ひとり棲む、
 柴の折戸を、
 とふものは、
 山の松かぜ。
 猿さしなく、
 聲もきこえて、
 秋の夜は、
 いやしくさびし。

道の奥、
きはめしゆけば。

村時雨、

わびしかるとも、

とこしへの、

楽しみつきじ。

世の塵の、

かゝらずあれば、

心にも、

かゝる雲なく。

月かげは、

すみにすみつゝ、

天地の、

ひびきを傳ふ



寂として六波羅密寺月更けぬ
朝寒み傾城に借す羽織かな
十町を案山子三つて守りけり
秋寂に見なれし狂女來ずなりぬ

白 蓮

濁れる世とは白蓮の、
氣高く咲ける池の面、
汝れが心を愛つゝも、
植にし人を頼もしきかな。



秋の夕尼一人の渡舟かな
ホヤ二件後の月夜の曇りかな
古來百年猶ほ青衫の案山子哉

慈 愛

玉の臺うゑに住む人も、
賤が伏屋ふしやに育つ身も、
何にかかはらん父母の、
我兒を思ふ可愛さは。

同じ事とて朝夕に、
撫でつゝすりつ行末を、
かけて頼みて四つ五つ、
六つが七つに成にけり。

親のつらく思ふやう

宿世拙なく貪しくて

數にもあらぬ身なれども

かく有がたき世に逢ふて

文字見ぬことの耻かしさ

せめて此兒に習はせて

慰めばやと思ひ立ち

學びの庭に入れにけり

學びの庭に入りてより

照る月曇る日休みなく

通ふ姿のしほらしく

受くる教へは一筋に

心に留めて何事も

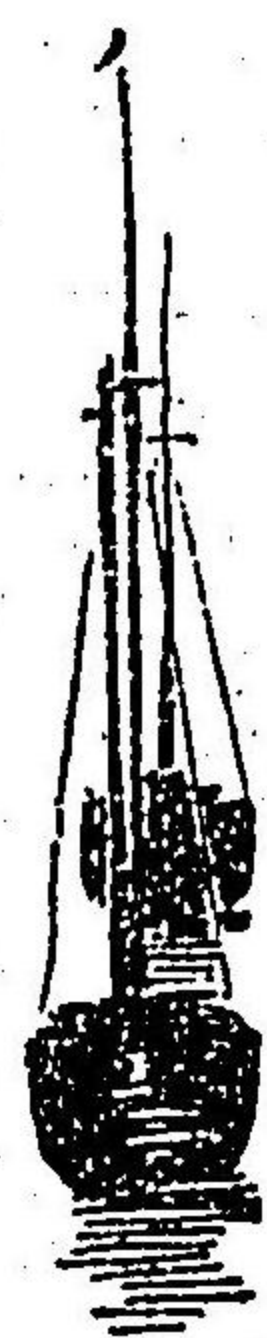
愚ならねば讀み書きも

身の行ひも取り分けて

同じ組より勝れけん

嗚呼なれしうき世は六十年

我子のことにあくせくと
老の夫婦は頭さへ、
霜とかわるは知らざらん。



裕着て兵兒帯古き書生かな
若竹の窓に酒呑む男かな
蚊柱に水打掛くる丁稚かな
晝顔やトシネル拔し涼車の道

あかつき鐘

曙光に御手をかざしつゝ、
晝の御神はさけびけり。

汚れはあれど塵はあれど、
晝は再び來れるぞ、
森羅万象もろともに、
ねむりの夢の醒めよとて、
今や鳴るなり、あかつきの鐘。

* * * * *

四つよつの夜

こゝは花見の借部屋に、
徳利倒れて上郎寐ぬ、
物の音やみし奥庭に、
しよんぼり霞む捨かどり。

馬には草を嗅かが飼ふ、
お前は草鞋ちやと脱いて、
それ行水ぎやうすいもすんだなら、
好きな素麵も冷えてある。

萩の花ちる山寺に、
本堂荒れて月ぞ洩る、
村の若い衆が五六人、
百物語ふけにけり。

按摩かま上下かみしも八百文、
聲より人の影たえて、
辻の柳に一だいの、
人力のこる寒さかな。

*
*
*
*
*
*

冬の月

尾花が袖も、霜かかれて、
 庭の落葉に、かぜさわぐ、
 友をやしのぶ、妻やとふ、
 浪に聲そふ、浦千鳥。
 閨のうづみ火、きえはてし、
 雲井にこぼる、冬の夜の月。



名なし草

小川の音に眼をひらき、
 あけゆく空をあふぎつゝ、
 くれゆく岸にねむりつゝ、
 人の知られぬ名なし草。
 解くる深雪の香を吸ひて、
 美はしき日にいだかれつ、
 情けの雨にはぐくまれ、
 姿らうたくおひたちぬ。

あなうらやましとことにはに、
み空の野邊にさける花。

あゝ野に生まれ野に死する、
草の命のはかなしや。

ちさき草にも情けあり、
さゝやく風にうなづきぬ、

小さき花にも思ひあり、
やはらかき日光に色まさる。

夜毎いくそのものおもひ、
かよはき胸にむすぼられ、
あだし涙のつゆしげく、
なげくもつらし花草や。

艶なる色のあせぬ間に、
君がやさしき手につまれ、
にほへるまゝにふるゝとき、
わが世の幸はそれなりや。

*
*
*
*
*
*

初日影

外國船も集ひたる、
港静かに風なきて、
海原遠くうらくと、
初日の影の匂ひつゝ、
豊さかのぼる日の本の、
新しき年は來りけり。

その名ふりにし山河の、
みゝしきいろもさながらに、

大和島根はのどかにて、
治まれる代のめぐみより、
幸ひ祝ふもろ人の、
笑みつゝ今日を迎へたり。

御國を護る丈夫は、
劍に魂をこめ磨ぎて、
洋渡りする商人は、
世界の富を競ふべく、
いやさかえゆく國民の、
樂しき年となりにけり。

ひらめき渡る旗風に、
うたふ八千聲よろづ聲、
ほがらくととるきて、
地球の上の八隅まで、
國の光のかゞやける、
年たつ空のめでたさよ。

ことしはいよゝ望みあり、
わが同胞よいざともに、
奮ひ起りて事終へて、

勇み勵みて業成して、
いかで喜びうれしくも、
またこゝん年を待たましや。

年の始めはちのづから、
心もさらにあらたまり、
わが國人はしかすがに、
御代ながれと祈るらん、
新高山のふもとより、
千島の沖のはてまでも。

*

*

*

*

*

*

*

樂しき雨

そほ降る雨に誘はれて、
訪ふ人あらば語らんと、
微笑みそめし梅が枝に、
霏し翼をやすめつゝ、
我物顔にうぐひすの、
清く囀る聲きくは、
つれづれに詫ぶる雨の日の
樂しきものゝ一つなり。

そよ吹く風に送られて、
妹がやさしき琴の音の、
かすかに洩るゝ折からに、
軒をつたふる雨雫の、
音さへ和して一層に、
清く床しく聞ゆるも、
つれづれに詫ぶる雨の日の、
樂しきものゝ一つなり。

*
*
*
*
*
*
*
*
*
*

あはれ人の世

夢の浮世に限りなき、

思ひを焦す人の身は、

風に亂るゝ白萩の、

葉末に置ける露ぞかも、

吹き來る風の心なく、

夕ゆふ開ひらきて今朝けさぞ散る、

果敢なき萩の白露に、

宿る間もなき月の影、

白木の弓

行くべきみちの暗きに、

羸弱れいじやくき心ぞ傷ましむ、

鬭争たうじゆうの世にしあれば、

わがとらは白木の弓、

拾束しゆくわく、十五束じふごくわくの箭、

なほひくにたゆ、

たゞ弓弦きうげん雄々ゆうゆうしき響ひびなす、

もれ人の弦げんにしかず、

神の園かみのみに育ちて、

紅の果實重く。
枝たわむ良木の如く、
張られしや白木の弓、
つる、こくらに鳴りて、
白鷹の羽に飾られし。
たくましき征矢の、
風を切つて行くは何處ぞ。
世をのろふ魔神の群か、
果た、敵人の胸か。
あらず、歡樂の満てる、
美はしき花園なり。

白日、たけなほ 関に薫する花の、
わが征矢の羽音に。
地に委するを見ば、
あゝ淋しく微笑む。
われ弓をとるとき、
くぼみたる胸には。
『怨恨』満ちて、
鉛の如き血潮よどむ
われ箭をとる時、
『追憶』胸に起りて。
やせたる腕は、

あゝ戦慄にたゆとふ。

狂はしう燃えたちし、

鏃の火は滅ひたれ。

浴たかりし戀よ、

など永却に忘れざる。

わが胸を逃れ逝きし、

彩紋ある蝶の翅を射らむに。

飾りなき白木の、

嗚呼、弓なほ強からず。

*

*

*

*

*

*

*

夕まだき

民のかまどに立ちのぼる、

烟も今はうち霞み、

奥そこ知らねおぼろにも、

匂ふ花のみ見えにけり。

長閑けき春にうち興じ、

さはぎし童^{わらわ}今歸り、

空こそ見えねかすかにも、

歌ふ鳥のみ聞えけり。

世を面白と謠ひける、
馬曳く人の唄絶えて、
影もおぼろに霞みける、
軒端に近き梅と月。

*

*

*

*

*

*

*

初秋や夕暮雨の片在所

白菊や葉にこそ霜の見へてけり

盛りなり天長節を菊の花

女郎花なまめく色の亂れ哉

星の魂

瓊の宮殿にかしづきて、
天なる姫の身ながらも
彩ある雲にあこがれて、
我かきゆる黎明や。
いま人の世に降りきて、
蓮はぢの花にやどりけり。
星のみ魂のこもりたる、
はちすの花の粧姿や。
翠の霓裳、彩紋もなく、

なよげに見ゆる其面の
冷い哉、たゞ眞白なる。

やつれし姿かへりみて、
姫のこゝろや辛からむ。
水鏡みつむまなざしに、
あふれていづる白露の。

去にし快樂をくり返す、
追憶ふかきをそらにして、
あふゆくりたく彩雲の、

はえある客を望みしが。

天なる戀をつゝみては、
げにむすぼれし唇よ。
紅の香たかく戰兢て、
蕾はこゝにひらきたれ。
戀のさゝやき音も高く。

愛の根ざしの露ほはむ、
水底、ふかく濁るとも。
それよ幸なれ罪の子の、

聖き光明にたえしむや。
行方もわかぬ迷はしの、
やみにぞ戀は安からむ。



黒木賣の松原 通る月夜かな
萩の月や明けなば散らん花の色
門の田や稻の穂に出る今朝の秋

眞こゝろ

さりやうがようて 氣がやさしうて、
軀か丈夫で 仕事がすきな、
戀しいとのごの ひとりの様よ、
様は二十一 徴兵検査。

うれしかなしの 涙にくれて、
明日を案じりや 輝るのい様の、
笑ふよふなが いとすらめしや、
早くとられよ 徴兵検査。

二年三年は

何のわたしも

様が死んだら

かたき討ます

うつゝか夢か

弓矢のすへよ

長刀ふりて

心配めすな

ちるや紅葉

不意に

突出す

くれの鐘



うたがたり

世界幾億人住めば

世界幾万詩はなる

皆をのくの聲なれば

何れ悪しくはあらねども

此世のためと吾ならば

如何になるものを誦すべき?

少さき快樂を願はねは

たゞ風流と笑ひつゝ

獨り樂む詩人の

唱へる詩を唱ふべく

しかく要なき間隙と

義務を遂に吾もたず

言ふこと勿れ善と美を

詩にたへて世の人に

若き樂しみ與へんと

今人の世に住めるもの

かゝる尊き詩の譜を

誦さんに餘り卑くかりき

月と花とに獨りわれ

樂しむものと極はまらば

たゞ世の中の善と美の

讚美に便せんのみならば

詩は要なきものなりき

詩はいやしきものなりき

かゝる眞理を夕暮に

鳴ける蛙に吾きゝぬ

『吾は蓮華と菫との

清きに媚びて鳴くものか

日照田の面の水落ちて

枯るゝばかりの稻の穂の

濟ひのために天神に

雨乞ふものと知らざるや』

今人の世に聖道の

雨水つきて人かはき

たゝざる様を見ながらに

大聲長呼身を捨てゝ

聖道の雨求めんを

詩人の責と云はざるか

人は迷ひに迷ひつゝ

野心なやみの針をもて

自己が心を碎きたり

かくて美の神去りましぬ

あゝ此悲境 此凄地

濟ふは詩にあらざるか

形なきものはいざ知らず

心なきもの又しらず

しかはあれども詩人よ

詩人と名を呼ぶからに

あゝ、なごこゝに、もだせるや

あゝ、なごこゝを、もだせるや。

* * * * *

無 心

搖籃にゆらるゝうなる見よ、
汝の魂の遊ぶところ、
花を手折りし彼の山か？、
魚を掬ひし此の河か？、
戀しき母のふところか？、

蕾の花の口もとに、
をりくよする笑みの浪、
塵にけがれぬそか容姿、

天つみ國をに在すてふ、
神の姿もかくやあらなん。



月の雁夜にありたけの景色哉
茸狩のたまく得たる一つ哉
菴蓼の花左へ二丁大師道
名月や客ありげなる峯の寺
月今宵歩哨の劍くもりなき

憂き世

遠山寺の、鐘の音も
寐覺に聞けば、物凄く
彼方の里の、遠ぼへも
心にかゝる、老の僻
寐られぬまゝに、つくぐと
● 過にし方を、想ひやり
涙に袖ぞ、濡れにける
さてもはかなき、身なるかな
たのみ甲斐なき、この世にも

暫し樂しく、住ひしを
むかし建てにし、その家に
焰ほのよとなりて、跡もなし
山をなしたる、黄金をば
みな食られしぞ、あさましき
想ひ出せば、この里の
代々長ながなりし、わが家は
積み重ねたる、その壘の
水とふりゆく、ためしにて
いぶせき小屋に、遷りしは
今は六年の、むかしなり

棲みし日かずも、立たざるに

妹脊は黄泉よみに、旅立ちぬ

想へば昔し、鴛鴦うづすまの

襖むすの下に、百千歳

こめし契りぞ、あだなりし

今より後は、慰むる

かたも渚なみの、濱千鳥

何を力に、跡をとめん。

《なにがし老人の述懐》

*

*

*

*

*

*

*

つきせぬ怨 《亡き友》

稻穂實れる、世の秋の

われにつきせぬ、怨あり

衣手寒く、吹きわたる

風に野菊の、色あせて

同じ運命いのちの、蝶のごと

痛みぞまさる、君はしも、

芒みだるゝ、山の邊の

千草に結ぶ、露ふかく

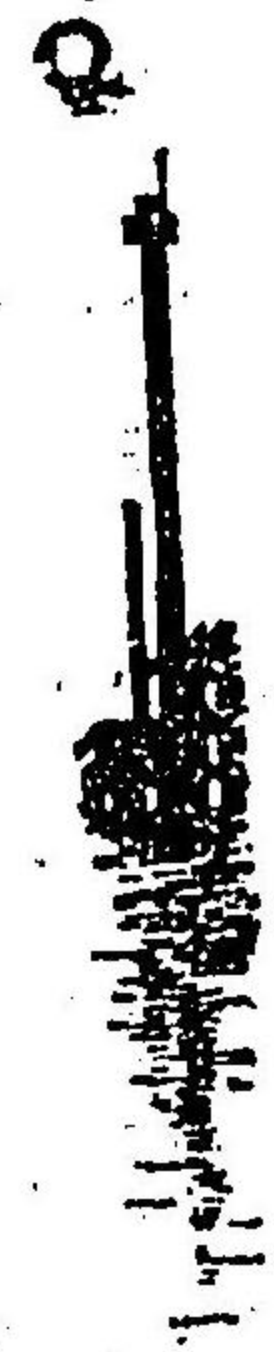
野末にすだく、虫の聲
星もあはれに、ながめつゝ
うすらぎかゝる、ともしびに
みとりの人ぞ、たへがたき。

收^か穫^りまづしく、憂^{うれ}ひしが
豊^{ゆた}けき年の、この頃よ
村^{むら}の祭^{まつ}禮^りの、にぎはひを
聞^きかしまつれど、いらへなく
ひとり悲^{かな}しき、夕^{ゆふ}まぐれ
君^{きみ}はをはりを、告^つげんとす

さらばと云ひて、名號を
唱^{とな}へ給^{たま}ひし、終^{つひ}聲^{こゑ}は
こなたの胸^{むね}に、泌^{しみ}みつれど
あだにゆきぬる、一瞬^{いつしん}の
のちはさながら、夢^{ゆめ}なりき
聲^{こゑ}音^ねはなほも、残^{のこ}れども

穂^ほ蔦^{づつ}しげれる、里^{さと}川^{がは}の
ながれに沿^{したが}ひて、柳^{やなぎ}散^ちる
土^{つち}橋^{はし}渡^{わた}りて、けふくれば

半なつかくづれし、砂山に
夕べさびしく、風たちて
あはれかなづる、松の音。



夕顔の濡葉に淡し月の影
雲の峯怪しき色の配りかな
たそがれて風呂たく門の田植哉
鉢植の若竹すつと延にけり

機織る乙女

機を織りく、乙女子が

嘆く心の、裡問へば

織出す綺羅は、數あれど

うたて貧苦に、生れ來て

我身ばかりは、嫁入の
長きをかこつ涙のみ。

*
*
*
*
*
*
*
*
*

君やゆかしき

かゞやく青葉ほそ徑みちの、

夕日の影につき消えて、

玉屑たまごを流るゝせゝらぎの、

げに音をこそは聞くべけれ、

たまを流るゝ細流せうりゅうぞ、

あゝ君がむね吾がこゝろ。

秋風さむくおち葉して、

情の清水堰かれて、

苔にうもるゝその嘆き、

聲はあふれて野邊にみつ、

あふれし情よあゝさらば、

火となれ風と雲となれ。

君夕まぐれ欄に凭り、

空をあふげる面影おもかげに、

淡くなづめる嘆息は、

なに追憶おぼえの影ならん。

なにおもひでの影ならん。

さぞやかたしくあけの袖。

むらさき薫る山の端や、

そは美はしき夢とこそ、

ひるがへり行く花びらの

彩いろある酒のあさぼらけ、

あやある酒の朝ぼらけ、

げに夢ならず戀のうた。

鳥のしらべの香に匂ひ、

情けの清水野にしみて、

あかきは花よ深みどり

君や床しき玉小琴、

おもひぞ泊とどつる花の野邊、

ねたみは清ききてふ蝶の、

熱あつき情けの宿命すゝめかな。

君や床しき玉小琴、

熱あつき情けの宿命すゝめかな。

*

*

*

*

*

*

*

静に眠れ

暫しまどろむ、其ひまに
 何時か來にけん、蝶一つ
 鍬の頭に、眠るなり
 我れ今起たば、夢さめん
 静に眠むれ、我れも休まん。



閑居

澗谷の靄屋に、鎖されて
 紅塵に遠き、山の庵
 笥の水を、掬ひあげ
 松籟のみを、友として
 木の芽を養るも、唯一人。

さすや日脚に、時刻をしも
 知るなる窓の、破綻より
 颯と吹き入るゝ、山風に

得ならぬ香こそ、たぐひ來れ。



秋風や志賀の都の古すだれ
叡山や月に下り來る僧一人
鳥一羽行くや野分に遯れつゝ

老詩人

ひとたび枯れし万葉の、
樹蔭に坐せる老詩人、
加茂の眞淵の軸さびて、
襖破れたる四疊半。

王者の冠かむり思はねば、
煤にまみれし釋迦佛の、
勤苦尊き御像を
この家唯一の重寶たからにて

春 怨

青草萌ゆる、春の野に

若菜摘みつゝ、暮らしにし

昔の友は、一人嫁さ

二人ゆきつゝ、此春は

色香も深き振袖の

長さを叩つ妾のみ。

《某嬢の心裡》

*
*
*
*
*
*
*
*
*
*

歌のまきくゝ經の書まき

寄せて張る壁黒々と、

雨もりし痕おのづから、

梵畫の龍にまがひたり。

*
*
*
*
*
*
*
*
*
*

白菊や葉にこそ霜の見へてけれ

刀うつ音に秋立つ鍛冶か家

熊笹や樋に冷せし心太

生 花

花は清淨無垢にして

自然の美質を備へたり

近きよ都鄙の差別なく

知るもしらぬも弄そふ。

中に就いても生花の

年を逐ふてぞ盛なる

従ひもつて其の業の

工夫こらしてさまぐと。

風姿形容見るべきも

心なくして楽しむは

翫弄物に過ぎんのみ

其心とはいかなるぞ

一つの瓶は地球なり

水はすなはち五大洋

眞は君なり添は臣

客は他國と接待場。

其の位置をしもあやまれば

國としてみだれ家やぶる

かたちを示すものなれば

形容のみに止まらず。

水あげしぬる心持こころて

人の務と爲るものと

花生く毎に思ひなば

子孫に流れいつとなく。

招かず富貴の時やこん

夢忘れせど世の人よ！

《生花に熱心なる某嬢に寄す》



鉢ながら芭蕉破れけり今朝の雨
長き夜を話し上手の按摩かな
箒木の畑に虫鳴く月夜かな

撓みし枝

長者の娘うわさある、
姿やさしき姉妹の、
恵み洽ねき園にして、
林檎の枝は撓みけり。
紅き果實は白日の、
天の榮光にかゞやきて。
百合にもまさる愛の手に、
装はれにし姿なれ。
根は水の邊に蔓りて、

枝は桓根を越えにたる。
佳き地を占めし古株の、
林檎は弱き樹にあらず。
樂器や枝に懸けられし、
怪しき物の音に怖ぢて。
姉、美果の凶説けど、
妹、とみに宜をはず。
或日都の若き繪師、
長者の家に宿りしが、
渴ける血潮いやさんと、
林檎の果實乞ひにけり。

怪しき音を危ぶみて、
 姉は恐れて近よらず。
 妹は獨り笑ましげに、
 撓みし枝に手を觸れぬ。
 ナイフの光震ふまで、
 嬌羞、情、こもりたる。
 皮とりさりし甘き果の、
 汁にや繪師は酔ひにけむ、
 戀を得たる妹の、
 歡樂さても短くて。
 繪師は日ならず去りにしが、

かくて音信絶えにけり。
 胸に消え行く幻彩の、
 迹をし逐はゞつらからむ。
 たゞ追懐にあこがれて、
 黒き帳に墜ちなむを。
 優しき姉の情ある、
 戒れはこそ背ひては、
 たわみし枝を、慰藉にと、
 妹はなほも慕ひよりけり。

*
*
*
*
*
*